

京都大学	博士(文学)	氏名	上野大輔
論文題目	近世の地域民衆と仏教		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>近世日本における地域民衆と仏教との関係を、多角的な検討を通じて明らかにすることが、本論文の課題である。具体的な事例として主に取り上げるのは、長州藩地域における民衆と真宗・浄土宗との関係である。なお、ここで「民衆」とは、年貢・諸役を賦課した武士などの支配者とは異なる、被支配者、すなわち百姓・町人や穢多・非人などを指す。そして「地域民衆」とは、地域で生活を営む民衆、という意味である。但し、本論文で主な検討対象となるのは、百姓である。一方、「仏教」という言葉は、寺院・僧侶・教説などを含む総称として用いている。</p> <p>本論文は、以下に順次述べるように、全3部6章の本論と、その前後に配した序章・終章よりなる。</p> <p>序章では、前述の課題を提示した後、本論文と深く関わる研究史上の諸問題についても考察した。具体的にはまず、「近世仏教墮落論」に代わる歴史像を構築するための視角について論じる。すなわち、辻善之助『日本仏教史』近世篇の主要な部分を占める、仏教の形式化と僧侶の「墮落」、それと関わる民衆の離反や排仏論の展開といった諸点は、後学によって近世仏教史の「定説」としての「近世仏教墮落論」として把握されるようになり、近年においても、克服され切っていない、「辻説」＝「近世仏教墮落論」という認識が再生産されている。しかし「同論」は、その論理構造に踏み込んで検討してみると、近世仏教衰微の説明としても破綻しており、また「墮落」というのは価値判断であって、それ自体相対的なものであることが確認される。これを踏まえ本論文では、史料に基づく事実関係を「同論」とは異なる文脈のもとに再構築する必要性を論じた。</p> <p>次に、近世仏教論の総合化に向けて、最も蓄積のある真宗をめぐる研究が陥っている分裂状況を、如何に乗り越えるかについて考察する。すなわち、児玉識・奈倉哲三・有元正雄らの研究に対して澤博勝・引野亨輔が行った「真宗特殊論」批判は、三氏の議論の相対化に成功する一方で、方法論的批判をもって否認・排斥する傾向を有している。それに伴う分裂状況を克服するためには、具体的論証にも踏み込んだ検討が求められる、とした。また、澤博勝の提起する「宗教的社会関係」を一方で踏まえつつ、思想面の問題についても実態的な究明を進め、それを共有してゆく必要性を提起した。</p> <p>以上の諸課題を念頭に置きつつ、本論では幾つかの観点より事例研究を展開する。まず第1部「地域社会秩序と仏教」は、近世の地域社会に仏教が構造化され、機能してゆく様相に着目したものである。ここで「構造化」とは、仏教が近世の社会構造の</p>			

一部として、独自の形態で再生産されるようになったことの謂であるが、特に、僧侶を擁する寺院と地域民衆の家との間に寺檀関係が形成され、寺院・僧侶と関わる各種の行事が展開し、それらが教団のもとに組織化されたことを指している。また、「機能」とは、当時も自覚されていた顕在的な役割に加え、自覚されずとも実現していた潜在的な働きをも含む概念である。

第1章「真宗優勢地帯における浄土宗の思想的機能」では、長州前大津宰判地域の真宗と浄土宗を主たる対象とし、近世社会に構造化された仏教が担った社会的機能について、思想面を中心に具体的な検討を試みる。寺院率・檀家率や各種行事等を通じて、近世後期の当地域は真宗優勢地帯であったことが分かるが、それは16世紀半ば以降の真宗の本格的波及と、地域の門徒集団を一主体とする地縁的寺檀関係の形成を経た姿である。一方、延宝年間以降の網捕り捕鯨の発達を受けつつ、通浦では浄土宗向岸寺讃誉により鯨回向が執行され、元禄年間以降、位牌・墓・戒名・過去帳を伴う独自の供養形態が成立した。鯨回向は瀬戸崎浦にも普及し、大日比浦では讃誉を住職として浄土宗西円寺が建立された。こうして通・大日比・瀬戸崎浦を中心とする地域では、浄土宗も民衆の基盤をもって存立し、網頭の多くはその檀家に属していた。そして同宗は、真宗では代替不可能な回向を行使することで、殺生の罪悪に対処する独自の思想的機能を担ったのである。かかる知見を手がかりに、本章では、有元正雄の提示した近世真宗門徒の「殺生忌諱」を、脱呪術化の随伴現象として把握し直した。

第2章「大日比浦の展開と仏教」では、17世紀から18世紀半ばにかけての前大津宰判大日比浦の展開過程を、仏教などの宗教的要素も含めて、動態的かつ構造的に検証する。朝鮮出兵時の水夫動員による地域社会の荒廃以後、上利氏を中心とする復興を通じて、大日比浦が独立の浦として成立・発展する。その過程で、人口・戸数の増加に伴う網組織の拡充とそれをめぐる対立が引き起こされた。また、上利氏らにより浄土宗西円寺が建立される一方で、外地からの移住者による真宗寺院建立に向けた運動も展開した。その後、同浦は経済的危機に伴う分裂化に直面し、加えて瀬戸崎浦との対立関係を通じて、上利氏を中心とする浦の存立が重要な課題となったが、このとき同浦に併存した浄土宗と真宗は、浦社会の分裂を齎し得る諸集団の共同性を一方で表現していた。18世紀後期以降の同浦における浄土宗の興隆は、上利氏を中心とする浦社会の展開と適合的な関係において把握できるだろう。

次に、第2部「布教をめぐる相克」は、近世後期に地域的展開をみた布教活動とそれをめぐる対立の様相を提示したものである。

第3章「「捨世派」僧侶の布教と地域民衆」では、大日比浦の浄土宗西円寺で住職を務めた法岸・法洲・法道と、同浦をはじめとする地域民衆との関係について検討する。法岸・法洲・法道の活動として注目されるのは、西円寺やその他各地での活発な布教に加え、百姓の生活に即した教説、称名念仏と戒律を重視する点などである。同寺には、地元民衆を含む各地の行者の往生伝が集積され、そこからは、一定の事実関係を

踏まえつつも理念的に再構成された、模範的行者像を読み取ることができる。往生伝は布教も視野に入れて作成されたものであり、他宗に対する優越性を示唆する部分もある。一方、法道の「御垂誡」は、大日比浦民衆へ発信された教説の内容を知り得る素材であるが、ここで注目されるのは、来世での極楽往生を達成すべく、称名念仏と通俗道徳が併せて重視されている点である。かかる教説は、地域民衆に生活安定化のための規範を提供すると共に、統治者サイドの利害にも応じる性格を有するものであったと理解できる。法岸から法道に至る活動は、大日比浦の浄土宗興隆にとって大きな役割を果たし、明治以降、「大日比三師」の「伝統」が確立するのである。

第4章「大日比宗論の展開」では、天明3年（1783）及び文化・文政年間の長州藩地域を中心に展開した、浄土宗と真宗との宗論を「大日比宗論」として把握し、その展開過程・思想対立・社会的背景などを検討し、以て近世後期における宗教的対立の在り方について論じる。まず天明3年の宗論は、法岸の説法に対する真宗僧俗の集団的抵抗の中、法岸と真宗僧侶の大癡・天寧との論争として展開した。その後の化政期宗論は、法洲らと真宗門徒の中野玄蔵を中心的当事者としたが、彼らを取り巻く両宗のより広範な対立として拡大・激化した。文政8年（1825）には法洲が遠島に処せられたが、知恩院門主尊超法親王らによる内々の要請を受け、翌年7月に赦免となり、以後、宗論は一応の終息へと向かった。宗論の拡大・激化は、両宗の対蹠的な思想対立の構造に加え、①近世社会における仏教の構造化を経た、地域での宗教的活動の盛り上がり、②真宗と浄土宗とに二極的に分離した地域の宗派構成、そして③書物の流通と知識人層の成長を受けた、考証的著述による弁論の成立、といった社会的背景にも規定されていた。これらの要素が出揃った近世後期的な状況下で、大日比宗論は地域民衆を巻き込んで拡大・激化したのである。しかし、それは近世社会を根底から二分するものとはならなかった。その主な理由は、仏教諸宗に対する幕藩権力の中立的性格にある。すなわち、公認諸宗の教説の正否に干渉せず、加えて相互対立を抑止する統治権力として幕藩権力は存在したのであり、宗論の当事者もそれを批判できなかったのである。

続いて第3部「近代前夜の諸相」は、化政期から幕末期までの真宗に関する思想や行動を中心に論じたものである。

第5章「真宗信仰と通俗道徳」では、まず近世後期の有力百姓・在村知識人である中野玄蔵の著作を素材として、通俗道徳との関係で重要となる真宗信仰の基本的構造、及び通俗道徳の具体像や社会的背景について検討する。彼の著作にみられる真宗信仰は、蓮如教学を中心的根拠とする近世教学の影響下にあったが、通俗道徳との関係で第一に注目されるのは、その予定說的構造である。すなわち、極楽往生（救済）は信心によって予め与えられることとなり、それを前提として、現世での王法為本・仁義為先が定置されるのである。ここに、真宗信仰が通俗道徳を支え推進する構造が見出される。また、真宗信仰における脱呪術化の一定の実現も、通俗道徳の実践と適合的

な関係をもち得たと考えられる。一方、通俗道德自体は、真宗の救済論には還元されない個別の思想であり、それは儒教的知識を一基盤とし、家の存続を目的とする禁欲主義的規範として、化政期の「驕奢」の風俗への対抗や寛容を孕みつつ志向された。ところで、真宗信仰が通俗道德を支え推進する論理構造は、中下層百姓の真宗門徒間においても流通することがあり、その広範な広がりが想定される。このことからしても、有元正雄の「自力と他力の統合」論は、真宗教義・信仰の実態を的確に把握するものではない。それは理論的要請によって導き出されたものであり、その理論自体も妥当ではない。有元が真宗論の枠内で処理した倫理・エートス論は、真宗と通俗道德との関係論として再構成される必要がある。加えて、奈倉哲三が決別・克服の必要を主張する蓮如教学についても、同教学こそが近代にかけて門徒を規制し、信仰の根拠を提供したのだと展望される。

第6章「幕末期の民衆動員と真宗」では、幕末期長州藩の民衆動員において真宗が担った役割の究明に取り組む。まず、欧米勢力に対する海防に当たり、人々を国家に服従させ、進んで死に赴かせることを重視した村田清風は、そのために真宗の利用も試みた。一方、月性『仏法護国論』は、蓮如教学の有効性を重視しつつ、国家への服従としての海防に向け、門徒を扇動した。文久年間以降、藩内では諸隊の編制が進展し、僧侶を中心とする隊も結成されたが、中でも真宗僧侶の活動は顕著であり、月性門下の僧侶も主導的な役割を果たした。ここでは、来世での極楽往生と共に、現世での「皇国」への忠誠を積極的に志向するという、蓮如教学的構造をとった思想が、活動の一基盤をなした。また、欧米勢力や幕府との戦争を通じて民衆動員が進行する中、真宗僧侶による支配安定化・軍事動員のための活動も展開し、かくして真宗は、藩による民衆動員を促進する役割を果たしたのである。以上の歴史的現実、政治権力との対立面が強調されがちであった従来の真宗論や、仏教を欠落させた「民衆宗教」史などとは異なるかたちで、近代移行期における政治権力・民衆・宗教の相互関係の、一つの在り方を示していよう。

最後に終章では、各章の内容を整理すると共に、近世仏教論の総合的進展に向けた展望を行う。すなわち、本論文では全体を通じて地域民衆と仏教との密接な繋がりを示してきた。それは、近世社会における仏教の影響力や存立意義の提起ともなったであろう。仏教は、その儀礼を通じて地域社会の思想的基盤を構成し、共同体的結集の紐帯ともなった。その教説は地域民衆の思想と行動に影響を及ぼし、宗教的対立を招くこともあった。また、仏教と民衆との繋がりは支配・動員の媒介ともなったのである。本論文を通じて展望される論点は次の通りである。第一に、本論文で主たる対象とした事例以外も視野に入れて、近世社会における宗教的秩序の解明を進めてゆく必要。第二に、その一環として、本末・寺檀制という身分的な編成方式とは異なる地域的な教団編成方式の究明や、幕藩権力と宗教との関係の再検討を通じて、従来の宗教統制論などとは異なる新たな教団論・行政論を構築すべきこと。第三に、日本以外の

諸地域も視野に入れた研究の可能性。第四に、仏教を含めて近代移行期における政治権力・民衆・宗教の関係史を構築してゆく必要。第五に、それと関わり、「民衆宗教」論の見直しを可能とし、近代宗教史像の再構成にも繋がり得る近世仏教論の意義、である。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、長州藩地域における民衆と真宗・浄土宗との関係を地域社会に足場においてその具体像を描き、それを通して、近世日本における地域民衆と仏教との関係を明らかにしようとしたものである。全体は、3部6章からなり、序章と終章が配されている。序章では、研究史を総括し、課題を提示する。第一部では真宗優勢地帯における浄土宗の思想的機能を、第二部では近世後期に地域的展開をみた布教活動とそれをめぐる対立の様相を、第三部では化政期から幕末期までの長州藩地域における真宗に関する思想や行動を分析する。

近世宗教史研究においては、戦前以来、辻善之助のいわゆる「仏教墮落論」の影響が大きく、いまだその影響を完全には払拭しきれていないが、1970年代に入って真宗の「独自性」を中心に研究が大きく進展する。しかし、分析の対象が真宗に限定されていたことから、90年代以降、「真宗特殊論」への批判が起き、近世仏教史を総合化する必要性が強くと主張されるようになってきた。

本論文の際だった特徴は、こうした動向を踏まえつつ、民衆と仏教との関係を方法的批判ではなく、具体像を提示することで、近世仏教史の総合化を企図している点にある。

第1章では、真宗優勢地帯である長州前大津宰判地域における浄土宗を主たる対象とし、延宝年間以降の網捕り捕鯨の発達のもと、浄土宗による鯨回向が執行され、元禄年間に位牌・墓・戒名・過去帳を伴う独自の供養形態が成立することを明らかにし、浄土宗が、真宗では代替不可能な回向を行うことで、殺生の罪悪に対処する独自の思想的機能を担い、この地域で民衆的基盤をもって存立したとし、近世の地域社会において仏教が構造化し機能していた様相を描く。

第2章では、17世紀から18世紀半ばにかけての前大津宰判大日比浦における浄土宗・真宗の展開過程を、大日比浦が独立の浦として成立・発展する過程、そして浄土宗西円寺の建立、さらに外地からの移住者による真宗寺院建立に向けた運動、経済的危機に伴う浦の分裂の危機等の具体像を明らかにする。

第3章では、大日比浦の浄土宗西円寺の住職法岸・法洲・法道による布教活動を取りあげ、西円寺やその他各地での活発な布教、百姓の生活に即した教説、称名念仏と戒律の重視、地元民衆を含む各地の行者の往生伝の集積など、布教の様相を多様に明らかにし、そこにみられる教説は、地域民衆に生活安定化のための規範を提供するとともに、統治者サイドの利害にも応じる性格を有するものであったとする。

第4章では、天明3年(1783)及び文化・文政年間の長州藩地域を中心に展開した浄土宗と真宗との宗論「大日比宗論」の具体的展開を跡付け、両宗の対蹠的な思想対立の構造のなかに、近世社会における仏教の構造化を経た地域での宗教的活動の盛り上がり、真宗と浄土宗とに二極化した地域の宗派構成の有り様、そして書物の流通と知識人層の成長を受けた考証的著述による弁論の成立といった社会的背景の存

在を指摘する。

第5章では、近世後期の有力百姓・在村知識人である中野玄蔵の著作を素材として、通俗道德との関係で重要となる真宗信仰の基本的構造、及び通俗道德の具体像や社会的背景について検討し、彼の著作にみられる真宗信仰は、蓮如教学を中心的根拠とする近世教学の影響下にあったが、そこには通俗道德を支え推進する構造も見出されるとする。また、真宗信仰における脱呪術化についても触れ、そこに通俗道德の実践と適合的な関係をもち得たとする。

第6章では、幕末期長州藩の民衆動員において真宗が担った役割を、村田清風の真宗利用、真宗僧月性の役割、文久年間以降の藩内での諸隊編制における真宗僧侶の活動を取り上げ、来世での極楽往生と共に、現世での「皇国」への忠誠を積極的に志向するという、蓮如教学的構造をとった思想が、活動の一基盤をなしたとする。

以上述べてきたように、地域民衆と仏教の関係を、長州藩地域における浄土宗・真宗を素材にさまざまな角度から具体的に分析し、豊かな像を描き出した点が、本論文の最も評価しうるところである。また浄土宗を分析対象に組み込んだことで「真宗特殊論」から一步踏み出した点も大いに注目される。しかし問題がないわけではない。論の展開にあたって特定地域の具体的事象を一般化あるいは理念化する手順に多少飛躍がみられる。だがこうした点は、論者の今後の努力によって克服されるであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2010年2月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。